

# くすり博物館だより

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY

内藤記念くすり博物館 〒501-6195 岐阜県羽島郡川島町竹早町1

Tel: 058689-2101 Fax: 058689-2197 <http://www.eisai.co.jp/museum/>



企画展

## くすり収納のかたち

～印籠から百味筆筒まで～

今回の企画展においては、初公開の資料も多く、来観者の皆様にご好評をいただいています。近くはもちろんのこと遠方からもおこしいただき、4ヶ月の間で2万4千人の方にご来館いただきました。

往診用薬箱、印籠、きんちゃく、百味筆筒などの前で、その精巧な造りにしばしたらずんで見入っている方もいらっしゃいました。薬の入れ物は同じ用途であっても、使い手、造り手によって違いがあり、形や素材も多種多様で興味深いものがあります。また、いかに薬が貴重であり、特別なものであったかなど、一つ一つの入れものから感じ取っていただきたく思います。



▲企画展ポスター

企画展会場▶



### <行商用の薬箱>

江戸期売薬業の隆盛に伴って、売薬業者が宣伝を兼ねるようになり、人目を引く扮装や呼び声、動作など、あるいは薬箱の取っ手のカチャカチャなる音などで人気を集めました。また季節の風物詩として親しまれるようになりました。



▲一粒丸薬箱 (江戸/32×38×89)  
一粒丸は成田山新勝寺前の三橋家の家伝売薬。店頭飾ったり、担い売りに使える形になっています。

\*サイズの単位はcmです

### <日本の医療制度の導入と薬箱>

江戸時代の日本では漢方医学が中心でした。明治維新後は漢方から西洋医学への転換が急がれ、明治7年には医制(全国の医師を文部省の管轄下におき、国家として西洋医学主体へと転換を図った制度)が敷かれました。これ以降、洋方医の時代へと移行していき、やがて洋薬の使用も増えて薬箱もガラス瓶に入れられる洋式のものが登場しました。

浅井家は愛知県豊橋市に代々続く医師の家です。9代浅井弁安〔文政5年(1822)～明治20年(1884)〕田原藩医・鈴木春山について蘭学を学びました。文久3年吉田藩公の侍医となりました。弁安は若くして上京し蘭方を学び、医学舎の設立も計画していたようです。なお、常三は弁安の息子で内科・外科医でした。



◀浅井弁安の使用した薬箱

(江戸末期～明治初期/21×24×24)

弁安は天保14年に開業しました。この薬箱の2本の圧尺(あっせき)は調剤時の薬包紙を押さえる以外に薬箱に差し込んで引き出しを固定する役割も持っていました。



▶浅井常三の使用した薬箱

(明治末期～大正/18×26×25)

薬瓶・乳鉢・乳棒・メスシリンダー・血圧計が収められています。ふたの裏側には薬包紙などが入るように工夫されています。皮のケースに入れて持ち運びました。

## ＜旅と薬＞

江戸時代は寺社参詣や商用などの旅が盛んになりました。旅には、身近な薬を携帯するのは常識でした。江戸時代に出版された『旅行用心集』にも、道中持っていきたい薬として「熊胆、奇応丸、返魂丹、五苓散、胡椒、延齡丹、蘇香円、梅花膏」と書かれています。主に胃腸薬や気付の薬、清涼剤などです。

薬の携帯には印籠、きんちゃく、道中用薬入れなどを用いました。形や構造に変化が富んでいて、デザインにもさまざまな趣向が凝らされています。

### 印籠

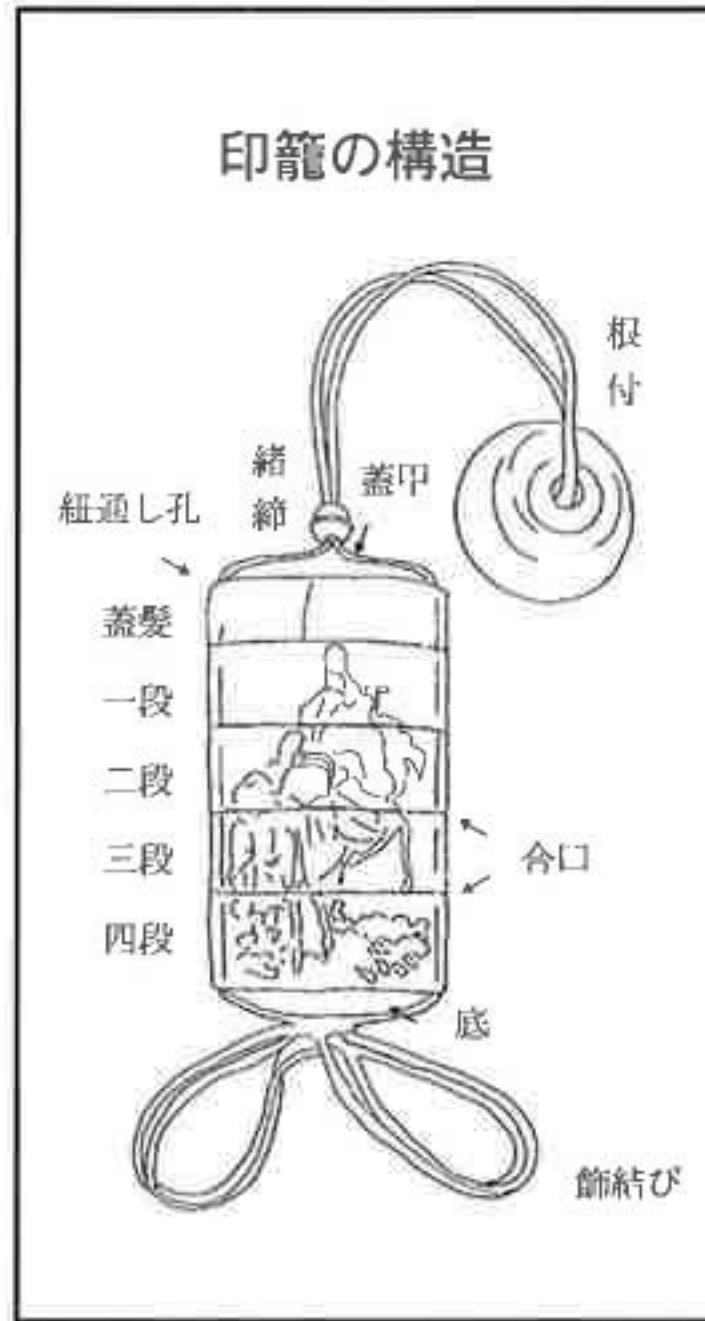
もともと「印籠」とは 室町時代に中国から伝わった印と印肉入れでした。しかし時代を経て江戸時代には、薬を入れて腰にさげた携帯用の容器で、はめ込み式になっているものを「印籠」と呼ぶようになりました。蒔絵を施すなど、次第に装飾の凝った美しいものが作られるようになりました。



▲梶子透かし鞘形印籠  
(江戸末期 / 9.5×5×3)  
密閉性の高い造りで三段重ねのもの。



▲引出しつき竹製印籠  
(江戸中期 / 7×4.6×2)



### きんちゃく

「きんちゃく」は、もともと小銭や薬、お守りを入れる袋でした。『倭名類聚集』に“和名於比不久呂”とあるのに始まります。革や縮緬(ちりめん)や羅紗(らしゃ)製、刺繍(ししゅう)で柄を施したものも作られました。



きんちゃく  
(江戸 / 11×10×2)



きんちゃく  
(江戸 / 12×12×3)

### 道中用薬入れ

軽くてかさばらず、なおかつ必要な薬を入れる小さな薬袋や、折たたみ式、あるいは、小分け式の小容器が考案されました。旅行中は大変なよりになったことでしょう。



▲道中用薬入れ (江戸 / 3×10×1)



▲道中用薬入れ (江戸 / 5.5×4×1)



▲道中用薬入れ (江戸 / 55.5×15×0.5)  
厚紙の上に折り畳んだ紙袋が付けてあり、中に薬を入れることができる。木版印刷で「大阪 心斎橋 近江屋安兵衛」と販売元の名前が見られます。



▲道中用薬入れ (江戸 / 7×19×0.5)  
鎮座丸、精気丹など小分けの袋を5つ収めることができます。

企画展について、詳しくはこちらをご覧ください

今回の企画展にあわせて『くすり博物館収蔵資料集③ くすり入れ』を出版いたしました。携帯用から行商用薬箱などの薬の入れもの等の解説と、約110点のカラー図版を収録しました。郵送も可能ですので、ご購入希望の方は博物館までお申し込み下さい(定価 2,000円)。なお『くすり博物館収蔵資料集① くすり看板』『くすり博物館収蔵資料集② くすり広告』もどうぞ。

天候不順だった夏も過ぎ、朝晩に涼気を感じる頃になり、いよいよ薬草類の収穫時期を迎えました。

最近ではこの収穫物を使って、ウコンやエビスグサで薬用茶を作ったり、またトウガラシで一味を作ったりしています。また、この一味を使って漬物も作りました。

そのほか、薬用酒・果実酒作りにも挑戦しています。ウメ、アンズを始め、ヤマモモ、ナツメ、ボケ、カリンなどまず一般によく作られているものから取り組んでみました。更にサンザシやサンシュユ、トウネズミモチ、オタネニンジン、トウキ、アマドコロ、ベニバナなどの生薬も漬けてみました。

詳しい作り方については、いろいろな本が出版されていますが、当博物館では、『薬用植物に親しむためのハンドブック2』の中で紹介していますので、参考にして下さい。気をつけてほしいことは、漬け込むもの、特に果実を漬ける場合は、よく熟した新鮮なものを選ぶこと。古いものや腐ったものは薬用酒が傷む原因となりますので、必ず取り除いてください。そ

のほか材料については好みがあるかと思いますが、一般的には、35度のホワイトリカーに漬け込みます。甘い方がよければ氷砂糖や蜂蜜を足してください。

飲みやすいものとしては、やはり梅酒が筆頭で、そのほかアンズ(果実)、ボケ(果実)、ベニバナ(花)、ナツメ(果実)など。カリン(果実)、アマドコロ(根)、サンザシ(果実)などは評価が分かれますが、比較的飲みやすいと言ってもよいでしょう。逆に飲みにくいものは、オタネニンジン(根)、トウキ(根)、トウネズミモチ(果実)、サンシュユ(果実)、ヤマモモ(果実)などがあげられます。独特の味や匂いのせいでしょうが、慣れるとこれはこれでよいものです。

薬用酒を作ってみてよかったことは、まずこの豊潤な香りと、鮮やかな色を楽しめることです。もちろん味も大切ですが、鼻や眼など五感を刺激することは、疲労回復や健康増進にはとても役に立つように思います。さらに、密封できる容器に入れれば、長く保存できます。

日本の夏は高温多湿で、睡眠不足や疲労の蓄積、食欲不振など、俗に言う「夏バテ」しやすい気候です。また冬は寒さが厳しく、風邪をひきやすい気候です。薬用酒は、滋養強壮・血行促進・咳止めなどによいので、日頃の健康状態や体質を考えて活用してはいかがでしょうか。市販されている薬用酒もいいですが、実りの秋、ご自分にあった薬用酒・果実酒を作ってみるのも楽しいものです。



薬用植物園主任 白井英夫



◆リースの土台作り

丸い土台は、クズやピナンカズラなど、つる植物を丸めましょう。丸めたつるにどんどん次のつるをつけたしていきます。切つてすぐ丸めた方がよいものと1日置いてややおれてから丸めるものがあります。

つる植物が身近にない場合は、枝を三角や四角に組んでも面白いですよ。庭木がなければ散策のときに拾った枝でもいいでしょう。枝を組むときは、針金やビニールタイ、麻ひもなどを使います。

夏休み親子教室は7月25・26日に開催されました。2日間で28組74名の皆さんがリースとポマンダー作りを体験しました。

リースを飾ってみたいけど、家で作るのはむずかしそう…。そんな風に決めつけていませんか？発想を変えて自由に創ってみるととても楽しいものです。くすり博物館では、夏休み親子教室で「夏のリース」制作を行ったところ、皆さまに大変好評でした。その中から実際に役に立つアイデアをいくつか紹介しましょう。



◆飾りつけ

親子教室で好評だったのは、生ハーブで飾りつけた“緑のリース”でした。ガーデニングで増えてしまったハーブや花をそのまま使ってみましょう。枯れたら取り替えればOK。乾燥に耐えられるものは日頃から集めておきましょう。夏は枯れたアジサイやエノコログサ、秋にはドングリやツルウメモドキなどの実を集めることができます。八角やシナモン・スティック、ベイリーフなどのスパイスを使うと香りがよくなります。

◆長く飾った後は…

金・銀、あるいは緑や茶色のスプレーで全体を塗ってしまえます。リボンをかけるとお正月やクリスマス用のリースに変身です。

## <新収蔵資料紹介>

### 新収蔵資料

新しく以下の資料を入手しましたので、ご紹介いたします。



#### ▲薬種切手

薬種原料の生薬などを購入する時、代価をこの手形で支払い、後でこれと引き換えに現金精算しました。あまり残っていないので貴重な資料といえます。

#### ◀安神散 版木

東京の虎谷豊二様よりご寄贈いただきました。大きさから紙看板のものと思われます。表裏にくすりの名前などが大きく書かれています。

錦絵 新吉原娼妓梅毒病院検査之図▶  
明治16年、国明作の錦絵。吉原の遊女が梅毒の検査を受けている様子を描いています。題材も珍しく、美しい作品です。

#### ▶体温計検定器

大阪の増田健一様よりご寄贈いただきました。薬屋さんの店頭で置かれ、お客様が持参した体温計の精度をはかったものようです。店の名前入りのものは珍しいものです。



#### ◀吸入器

各務原市の篠田昭子様よりご寄贈いただきました。このような形の吸入器は最近では使われなくなりました。



## TOPICS



#### ■友の会の薬草花壇が好評でした！

薬草友の会の皆さんが、薬草園の一角に薬草を使った花壇を造ってくれました。薬草園では、わかりやすいように1区画に1種類ずつ植えていますが、友の会の区画は何種類もの薬草を組み合わせ合わせて構成しました。7月から8月にかけて次々と花が咲き、まるで絵のような花壇に仕上がりました。

#### ■新パンフレットです!!

新パンフレットの特徴は、① 薬草園の紹介を増やし、② スタンプ&メモのスペースを作り、③ 地図をカラー化したことです。ご利用ください。



#### ■くろず餡はいかがですか？

くろず餡は、伝統的手法で作られた鹿児島産の黒酢を原料とした餡で、市販の甘酸っぱい餡とは一味違ってさっぱりとしたおいしさが人気です(1袋280円)。そのほか、羅漢果(ラカンカ)のど餡には、甘いキンカン味とさわやかなハーブ味があります(1袋 各380円)。ビタミンE・Cを加えた羅漢果プラスやサヤカ鉄キャンディー(1袋 各280円)も大好評です。郵送もできますので、はがきかFAXでお申し込みください。(送料はお客様のご負担となります)



#### ■1日で5000人来館！

5月30日に名鉄主催のハイキング大会があり、5,000人の参加者の皆さんがくすり博物館と薬草園を訪れました。見学後は一宮・ツインアーチを目指して全長12kmの道のりを歩いて行かれました。

#### ■博物館のホームページへようこそ

くすり博物館のホームページは、エーザイのホームページの中にあります。企画展のご案内を中心に、夏休み親子教室の様子なども見ることができます。アクセスをお待ちしています。  
<http://www.eisai.co.jp/museum/>

#### ■TVで紹介されました

NHKの「おしゃべりランチ」に館長が出演、企画展と親子教室の紹介をしました。そのほか東海TVの「びーかんテレビ元気がいいね！」でくすり博物館が中継地となりました。

#### ●●●●●博物館から●●●●●

くすり博物館は今、「健康に関する知識欲と好奇心を満たして人生を楽しみたい、という人を応援します」をモットーに活動を続けています。また最近では、生涯学習活動が特に重要となってきてきたので、その課外活動の一環としてもくすり博物館をご利用くださるようご案内申し上げます。

## <資料・図書寄贈者ご芳名>

(株)岩黒製作所 岩下哲典 大阪医薬品協会 蔵方宏昌 篠田昭子 親和堂薬局 武田科学振興財団 田中悟 千葉胤孝 津谷喜一郎 東京医薬品工業協会 豊橋市中央図書館 虎谷豊二 中村新三 日刊工業新聞社 日本科学技術連盟 日本新薬(株) 日本生命財団 藤田孟 堀内冷 正岡徹 増田健一 松浦薬業(株) 森納 薬業ニュース社 ありがとうございます(五十音順/敬称略)

人事 朝倉加代;退職 松尾三雄;異動

館長 三宅康夫 学芸員 稲垣裕美(編集担当) 学芸員・司書 野尻佳与子 伊藤恭子 庶務 森田麻起子 小島敦子(見学受付担当) 市橋由志子 薬川植物園 主任・学芸員 白井英夫 作業員 栗本省三 菊谷辰行 顧問 青木允夫 7th 逸見誠三郎 内藤記念くすり博物館 開館/9:00~16:00 休館/月曜日・年末年始(12/28~1/8)